

## 着任雑感／シベリウスと安岡センター長

基礎研究推進室長 根本 伸一郎

### 1. 着任雑感

今年の4月に基礎研究推進室長を拝命した。平成5年度の前端基礎研究センター(以後、「センター」)設立以来、早くも室長は私で6代目である。研究機関である原研は、優れた研究成果を世に出すこととともに、例えば事故時などその専門性により社会に貢献することによって評価されるべきことに異論はなかろう。その原研の主演は今更言うまでも無く研究者、技術者の皆さんである。その人達が頑張っているからこそ原研は原研たり得るわけで、基礎研究推進室はセンターの研究者の「しもべ」として日夜職務に励まねばならない。

その基礎研究推進室の職務とは言えば、例規集によると「業務の調整および庶務」とあり、英文では Management Office と表現する。事務処理のみを担当するセクションのような表現であるが、命名理由に思いを馳せるに、「研究を積極的に推進するため、壁に頭を打ち付けながら知恵を絞り、かつ実施するセクション」と認識すべきものと捉えたい。

### 2. センター — その魑魅魍魎の世界 —

センターの研究内容は多岐にわたる。センター会議での成果報告の際にDNAや中性子星、ダイヤモンドに関する研究をしていることを知り、ぶっ飛んだ。告白すると17ある研究グループの名前も実は完全にまだ覚えていない。そのようなセンターの多様性に対し、原研の本業は「原子炉」であるべきと考えている諸先輩もいらっしやるかと拝察するが、何事によらず境界線が曖昧になっている今日、原研の資産である様々なハードとソフトを駆使し縦横無尽に研究を進めることは、「発展」だと感じている。

私は高校の時、将来は音楽家か研究者になりたかった。「物理1000題」や「赤チャート式数学」を片っ端から「暗記」した。しかし所詮暗記は暗記、初めて見る設問には頭の中が真っ白になった。自分で公式を創って解いたり同じ解き方は絶対にしない主義の友人を見て、自分の限界を容易に察知し、潔く理数系を諦めた。センターの研究員は多分、そのときの友人たちのような魑魅魍魎に違いない。

さすがに安岡センター長は魑魅魍魎の親玉か。17の研究テーマを指導し、研究員の半分は所外からの様々な枠組みによる受入れで、外国人も多数いる。北で面白そうな研究が始まると飛んで行き、西にイザコザがあれば仲裁に飛び、東からヘルプがかかると肩を貸す。ベクトルの方向も強さも違うセンターで、強い求心力を保ち、理事長や役所に相談を持ち掛けられては、「センターのタスクや無いんけどなあ…」とニコニコ笑いながら解決するセンター長は、やはり常人ではない。

### 3. シベリウスと安岡センター長

センター長は夜7時以降、クラシック音楽を聴きながら仕事をしておられることが多い。音楽が好きという点では私との大きな共通点である。音楽は実に奥が深い。その作曲家の時代背景、境遇等が音になり訴えてくる。現象として分かり易いところでは、例えばチェイコフスキー好きには繊細な人が多く、バルトーク好きは議論家である。痩せた人でブラームス好きはまずいない。肥満のブラームスが描くバイオリンの運指は大らかだからだ。逆の理由で太ったショスタコビッチ好きは少ない。以上は自説。

聞けばセンター長はシベリウスがお好きとのこと。シベリウスはフィンランドの作曲家である。1957年に92歳で没しており、時代的には近代音楽の祖シェーンベルグと同時代を生きている。バッハ、モーツァルト、ベートーベンのようにポピュラーでは無いし、むしろ地味だが、音楽好きには気になる作曲家ではないだろうか。管弦楽曲「レミンカイネン組曲」、交響曲第2番は世界中のオーケストラの定番である。彼の創作の根底をなしたのは、精神的にも題材的にも徹底した祖国愛であり、それが熱狂的にフィンランド国民に受け入れられる背景をなしたのは、ロシアによるフィンランド支配であった。シベリウスを手軽に知りたいたい方には、交響詩「フィンランディア」を聴くことを是非お薦めしたい。祖国愛の表現法として、チャイコフスキーの直截的な序曲「1812年」と聞き比べると、なお、面白い。

新古典主義のストラビンスキーが第1次世界大戦後の作曲界を支配し、かたや十二音主義のシェーンベルクが近代音楽へと脱皮していくなかで、シベリウスは頑なに19世紀的な作風に固執した。と、言われているが、実は国民的英雄となっていたシベリウスは新しい時代へ駆けていく勇気がなかったのではないかと思っている。7つの交響曲は曲を経るごとに、近代音楽へ移行して宜しいか聴衆へ打診をしているかのように新時代のモチーフを試験的に登場させている。最後までドイツ・ロマン派的な交響曲第2番の大成功の呪縛から逃れられなかったシベリウスは、悩みつつも交響曲第9番にたどり着いたベートーベンとは結果として異なる。

安岡センター長は、シベリウスの音楽は発する悩みや不安、憧れを感じ取り、共感し、新しい時代に飛び込むことを躊躇しているシベリウスを励まし、シベリウスの創る新しい世界を見たかったのかも知れない。

「いままでの呪縛に捉われる事なんかないでえ。」とか言ってる。そういえばシベリウスは、時代の大きなうねりのなかで自身の可能性を見つめ直し、新しい価値を見出そうともがいている原研の産みの苦しみに一瞬ダブって見える。新しい「発展」という大きな可能性を持つ原研の未来に是非行きたい。